えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第76号
平成25年
(2013)
11 − 12

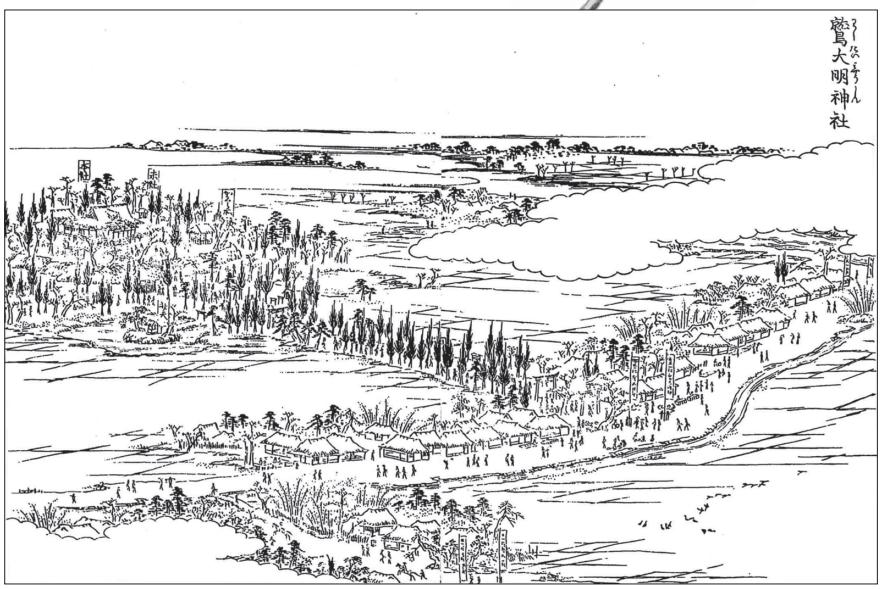
江戸東京博物館友の会会報

目次

年末の風物詩「酉の市」 ―そのルーツを探る！― …… 1〜2
データで見る友の会の構成／学習会「品川歴史館」…… 3
えど友広小路 …… 4〜5
会員に聞く「落語を演じる山内啓巳さん」／会員からの投稿「江戸東京の富士塚」／えど友サークルだより／友の会めも／「藩史研究会100回を迎えて」
友の会セミナー「忘れられた黒船クライシス」…… 6
友の会セミナー「武士の呼称」…… 7
見学会「再訪　江戸城周辺探訪その4」／友の会特別観覧会「花開く　江戸の園芸」…… 8
友の会特別観覧会「明治のこころ―モースが見た庶民の暮らし―」／江戸博クリップ「農村の歴史から都市の歴史へ」… 9
江戸名所図会を歩く・・・ ⑩「芝浦から月波樓」…… 10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11 〜 12

年末の風物詩「酉の市」
―そのルーツを探る！―

東京を代表する祭である「酉(とり)の市」は、11月中の「酉の日」に行われます。酉の日は12日ごとに来ますから、1カ月の間に、2回ないし3回巡ってくる勘定になります。3回ある年は火事が多いといわれたりしますが、それは提灯の灯(あか)りが蝋燭(ろうそく)であった頃の俗説です。すべての灯りが電気になった現在では、1年を締めくくる大切な行事として賑わっています。



▲江戸名所図会「鷲大明神社」

酉の市の始め

そんな「酉の市」を主催する「鷲(わし)明神」(足立区花畑(はなはた)　大鷲(おおとり)神社)は、元来「土師(はじ)」(陶工)の先祖を祀る「土師明神」でした。旧仮名遣いの場合、濁点を省略して「はし」と書くことは普通に行われます。また読み手の判断で、「わし」と読ませることもあります。土師を旧仮名で「はし」と書いたため、「わし」と読まれたのがそもそもの始まりです。これに「鷲」という漢字を当てたため、「鷲＝鳥＝酉」へと連想変換し、「酉の日」を祭日にしたのです。山崎美成(よしなり)の随筆『海禄(かいろく)』［文政3年(1820)〜天保8年(1837)］や『江戸名所図会』が考証しています。

▲浅草鷲神社

酉の市の縁起物

現在では「酉の市」に熊手は欠かせません。江戸東京博物館の1階ホールに「大熊手」が飾ってあるのも、酉の市の象徴だからです。しかし、「熊手」が現れる以前は「芋」でした。「鷲明神」を載せる最も古い史料は享保17年(1732)刊行の『江戸砂子』ですが、下記の通り「市で芋頭を売る」と記してあります。

「鷲明神　鶏大明神、花又村にあり(中略)市にて芋かしら(芋頭)を売也」

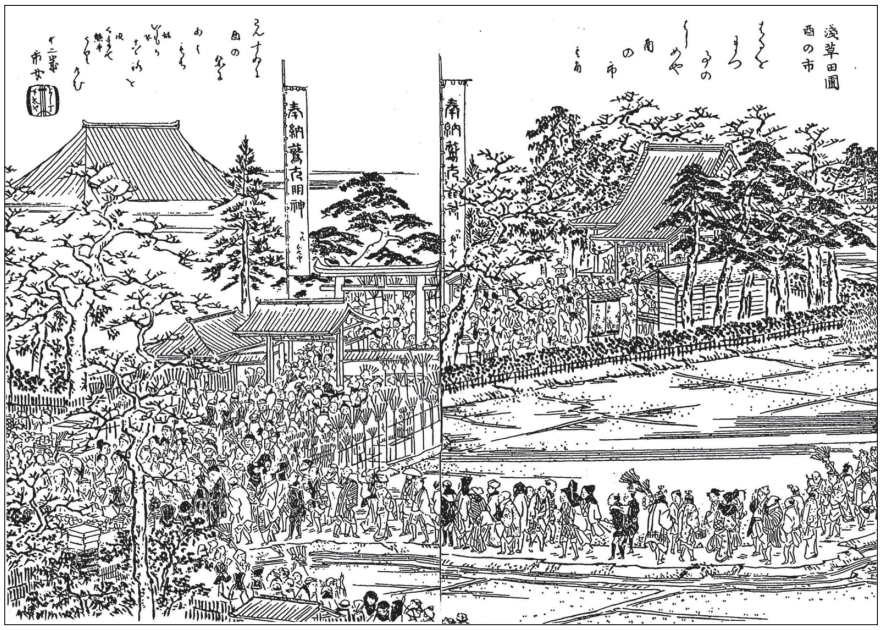
地誌『四神地名録』の寛政6年(1794)の序文を持つ写本にも、「唐の芋を売る」とありますように、60年以上経っても、売っていたのは「(唐の)芋」だけでした。

「華亦村鷲大明神と号せる小社有り(中略)名物とて唐の芋を売ると云」

熊手の登場

「熊手」が現れるのは天保年間(1830〜1844)になってからです。天保9年(1838)刊行の『東都歳事記』が「熊手」を載せた最初の史料で、次のように書いています。

(意訳)「酉の市」の別称を「酉の祭」と言うのは、「酉の町」を洒落て言うと思っている人がいますがそれは間違いで、正しくは「酉の祭」を略したものです。



▲東都歳事記「浅草田圃酉の市」

葛西花又村の鷲大明神社(通称「大とり」＝大鳥)と下谷田圃の鷲大明神社(通称「しん鳥」＝新鳥)があります。

(原文)境内にて、竹把、粟餅、芋魁を售ふ。

「大とり」というのは、曾祖父母を「大祖父、大祖母」と呼ぶように、年長者への敬意を込めた言葉です。つまり、花又の鷲明神社(大鳥)は親であり、下谷の鷲明神(新鳥)は子供(分社)であると主張しているのです。ここに初めて「熊手」が登場しました。

「竹把(熊手)」は、鷲が獲物を鷲掴みする爪を模したものといわれ、「福を鷲掴みする、かき集める」という意味が込められています。「粟餅」は色合いから「黄金餅＝小金持ち」になる願い。「芋魁(頭)」は芋が子芋を沢山つけることから、子宝に恵まれ同時に沢山の部下を持つ頭になることを願う縁起物でした。

下谷の鷲大明神社(新鳥)でも「粟餅」や「芋頭」を商っていました。こちらの「熊手」は特別に大きなものが求められておりますが、元は「青竹製の茶筅」だったようです。

▲大鷲神社拝殿（足立区花畑）

収穫祭から商業祭へ

当初参詣者へ販売していたのは「芋頭」であったように、「酉の市」はもともと収穫祭だったのではないでしょうか。それが、商業祭に変化するのは、下谷田圃に鷲大明神(新酉)が創建された天明年間(1781〜1789)以降、実際には『東都歳事記』の書かれた天保9年(1838)前後だと思います。田圃とは言いながらも、「吉原」や「芝居小屋(江戸三座)」に近かった下谷では、商業祭としての意味合いが強調されたからです。その変化が、「芋」や「粟」より、福(お金)をかき集める「熊手」になったと思われます。

さて、今年の「酉の市」は一の酉が3日、二の酉が15日、そして三の酉が27日です。東京に限らず、大阪、名古屋など、全国各地の鷲(大鳥)神社で行われます。年末の風物詩、縁起の良いお祭りに、お近くの神社にお出かけになってはいかがでしょうか。

【取材】文・写真：広報部会・光田憲雄

データで見る

友の会の構成

本年８月末の友の会会員構成をご紹介します。発足以来、毎年増加していた会員数は平成22年にはじめて会員数が減少に転じ、以降は横ばい状態が続いていました。本年は３年ぶりに64人増加し、最多だった平成21年の1,655人に次ぐ会員数となりました。

表１〈男女別〉

	H25年８月末		H24年８月末	
	人数	%	人数	%
男性	1,091	66.7	1,054	67.1
女性	542	33.1	514	32.7
不明	3	0.2	4	0.2
計	1,636	100.0	1,572	100.0

表２〈年代別〉

	H25年８月末		H24年８月末	
	人数	%	人数	%
30歳未満	3	0.2	5	0.3
30代	25	1.5	25	1.6
40代	87	5.3	87	5.6
50代	181	11.0	178	11.3
60代	573	35.0	582	37.0
70代	571	35.0	511	32.5
80歳以上	133	8.1	124	7.9
不明	63	3.9	60	3.8
計	1,636	100.0	1,572	100.0
平均年齢	67.3		66.3	

集計：事務局　岡野勝代

表３〈住居地別〉

	H25年８月末		H24年８月末	
	人数	%	人数	%
23区	823	50.3	821	52.2
23区以外	174	10.6	192	12.2
(東京都計)	(997)	(60.9)	(1,013)	(64.4)
埼玉県	165	10.1	143	9.1
千葉県	247	15.1	224	14.3
神奈川県	103	6.3	96	6.1
(３県計)	(515)	(31.5)	(463)	(29.5)
その他	124	7.6	96	6.1
計	1,636	100.0	1,572	100.0

表４〈入会年次別〉

	H25年８月末		H24年８月末	
	人数	%	人数	%
平成13年入会	137	8.4	150	9.6
平成14年入会	51	3.1	54	3.4
平成15年入会	84	5.1	95	6.0
平成16年入会	59	3.6	69	4.4
平成17年入会	80	4.9	88	5.6
平成18年入会	121	7.4	144	9.2
平成19年入会	164	10.0	173	11.0
平成20年入会	174	10.6	194	12.3
平成21年入会	122	7.5	144	9.2
平成22年入会	115	7.0	138	8.8
平成23年入会	121	7.4	161	10.2
平成24年入会	190	11.6	162	10.3
平成25年入会	218	13.3		
計	1,636	100.0	1,572	100.0

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成25年8月27日）

品川歴史館を訪ねる

友の会学習会の３回目は、品川区立品川歴史館を訪問しました。品川歴史館は、郷土資料の保存と活用、区民の文化向上を目的として昭和60年(1985)に開館しました。

学習会では、友の会下永事業部会長から開会挨拶と配付資料の説明などがあり、続いて、品川歴史館の柘植信行副館長より館内展示の概要の説明がありました。

歴史館建設前の敷地には、昭和初期に建てられた和風建築の安田善助(安田財閥創始者で晩年に東京大学安田講堂や日比谷公会堂を寄付したことでも知られる安田善次郎の甥にあたります)邸がありましたが、歴史館建設後も当時の茶室「松滴庵」や庭園を含めて残され、書院とともに伝統文化活動の場を提供(有料)しています。庭には水琴窟もあり、付属の竹筒に耳をあてると水の響きが楽しめます。

▲松滴庵

歴史館の建物は２階建てで、１階は２つの展示室と小講堂、２階は図書資料室などがあります。常設展示コーナーでは原始時代から江戸時代までの品川の歴史を知ることができるようになっており、大森貝塚の貝層の標本や品川区御殿山で発見された「常滑の大甕」などが展示されています。「常滑の大甕」は、今から約600年前に常滑(現在の愛知県常滑市)で作られたもので、品川までは船で運ばれてきたと考えられています。この頃の品川は、多くの船が出入りする港として栄えていました。２階には、「モース博士と大森貝塚」の展示コーナーや図書資料室などがあり、これまでの特別展の資料などを閲覧できます。

学習会では、歴史館のご厚意で「品川歴史館紀要」も配付していただきました。品川地域には大名の下屋敷がたくさんあったこともあり、それに関する論稿もありましたので、興味をお持ちの方は楽しめたのではないでしょうか。

副館長による説明の後は、各自ビジュアルシアターでの「浮世絵しながわ紀行」のビデオを見た後、各階の展示を見て回りました。

▲お世話になった拓植副館長

当館よりＪＲ大森駅方面へ歩いて５分程度の位置に大森貝塚遺跡庭園もありますので、解散後に立ち寄った方もいらっしゃったかと思います。

参加者60人。

開館時間は９時～17時。観覧料は一般100円、70歳以上の方無料。休館日は月曜・祝日(月曜が祝日の場合その翌日も休館)・年末年始。

【記録】文･写真：広報部会･竹中祐見子

えど友 広小路 会員交流欄

会員に聞く

「落語と講談を楽しむ会」100回記念で落語を演じた山内啓巳さん

山内啓巳（ひろし）さんは平成14年からの友の会ベテラン会員です。平成16年に会社をリタイア後、「えど友サークル」の一つ「落語と講談を楽しむ会」に入って、その世話人も務めました。太尾亭狸久（ふとおていたのきゅう）の芸名を持ち、第100回を迎えた会の記念イベントでは、「二番煎（にばんせん）じ」を演じ、喝采を博しました。

―芸名の由来を教えてください。

人間が狸に化ける噺である落語「田能久（たのきゅう）」にあやかって付けました。また太尾亭は今住んでいる横浜大倉山の旧町名太尾町から取りました。太い尾の連想で狸です。

―落語との出会いについてお話し下さい。

中学生時代から落語が好きで、ラジオから流れる柳橋（りゅうきょう）さんや金馬さんの噺を聴いてまねをしていました。大阪ABCのラジオ番組「素人寄席」に出演して鐘を鳴らし、賞金1500円と次回出場権を獲得しました。司会は佐々十郎さんでした。

また大阪大学には落研がなかったのでその創設に関わりました。

―友の会の会員になろうと思ったきっかけは何ですか？

落語をやっていて、分からないことが出てきます。江戸のことをもっともっと知りたいと思いました。時代背景や江戸っ子の心情など、江戸を知らずして江戸落語は語れません。会員になってずいぶん勉強になったと思います。

―関西ご出身なのにきれいな標準語で話されますね？

落語のおかげです。大阪の友人と話すときは、すぐにスイッチが入ってモロ関西弁になります。江戸落語で訛っていたら落語になりません。

―落語をやっていて得したことは？

東京に来た時、地名や場所を覚えるのに、柳亭痴楽さんの「恋の山手線」がすぐに役立ちました。「♪上野を後に池袋、走る電車は内回り…」

―お好きな落語家はどなたですか？

何といっても古今亭志ん朝さんです。リタイアしたら「おっかけ」をしようと思っていましたが、平成13年10月1日に亡くなられてしまいました。実はその年の7月に母を亡くしたのですが、その時以上の強いショックを受けました。粋で色気があって江戸の風を感じさせてくれる噺家でした。

―今どのような活動をされていますか？

平成16年に1都3県の落語同好会「楽笑会」に入り、また一昨年「かながわ楽笑会」を発足させました。それから今年4月に真打に昇進した立川談修師匠の「楽修塾」に入会してその指導を受けております。それぞれの発表会に出演の他、各地の老人会、ケアプラザ、老人ホームなど、年間20数回の高座に出ております。

▲落語を演じる太尾亭狸久さん

―最後に一言お願い致します。

落語をやっていて良かったのは、落語をすることで同じ趣味の人々、いろいろな地域の人たちと知り合えたことです。

今の若い人の中には落語家をお笑い芸人と同じに見ている人がいます。落語にはさまざまな人間が描かれています。落語を通して江戸を感じ取って欲しいと思います。

【聞き手】文：広報部会・岡本　脩
写真：山内啓巳さん提供

会員からの投稿

江戸東京の富士塚

百目鬼　喜久男

富士山が世界遺産に登録されることになりました。ご存じの方も多いと思いますが、東京のあちらこちらには、富士山のミニチュアが残っています。富士山のミニュチアとは、江戸時代の中期から明治にかけて、富士講の連中（れんじゅう）が築造した富士塚です。富士講は富士山信仰から始まったもので、講中は毎年富士登山を目指しましたが、富士登山が出来ない女性や子供のために築造したのが富士塚なのです。

200年の長い歴史の間に江戸市中には数多くの富士塚が造られましたが、その大半は取り壊され、現在東京23区内には約40基の富士塚が残されています。代表的なものとしては、国や都の文化財に指定されている下谷坂本の富士塚、高松(長崎)富士塚、江古田の富士塚、千駄ヶ谷の富士塚などがあります。富士塚は通常独立して築かれますが、品川神社、新宿西向天神（にしむきてんじん）、駒込富士神社のように、高台の斜面を利用して富士山に見立てて築造したものもあります。

都心に残る富士塚の多くは、富士山から運んだ溶岩を築山全体に埋め込み、その間に稲妻型に登山道を造り、一から九合目の合目石を立て、富士山に模して御胎内（おたいない）洞窟、小御嶽（こみたけ）社、鳥帽子岩、大沢崩れなどが造られています。

江戸の庶民に富士登山の喜びを与えるのが、富士講の最大の目的であったと考えられます。先達（せんだつ）という富士行者に引率されて、毎年夏に各講から選ばれた講中が富士登山を行いました。その旅は当時、往復8日も要したといわれ、老人や子供は参加出来ず、お山は女人禁制で女性も参加出来ませんでした。富士塚はそういう人たちのために、富士登山の楽しみを与えたのです。

今に残る富士塚を訪ねて、先人の富士山信仰を偲ぶのも興味深いものがあると思います。

えど友 サークルだより

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

8月は休会。

9月22日(日)「えど友」第44号10頁の「落語で江戸散歩③道灌」をなぞって新宿伊勢丹～西向天神社・大聖院～戸山公園～穴八幡宮～山吹の里碑(面影橋)と巡った。今回の参加者の中に、太田道灌のご子孫18代太田資暁さんがいらっしゃったのでコメントをいただいた。参加者38人。9月26日(木)コースは9月22日(日)に同じ。参加者42人。

◆落語と講談を楽しむ会

8月12日(月)藤村一夫さんの担当で、国立演芸場寄席8月中席の鑑賞会を行った。参加者17人。

9月24日(火)島田昭さんの担当で、案内人に講談師宝井琴柑師匠を招き、愛宕神社～増上寺～芝大明神へと講談の一節も入る案内で、講談散策を楽しんだ。参加者17人。

◆藩史研究会

8月9日(金)国定美津子さんが担当で「谷田部」藩について発表された。参加者18人。

9月13日(金)山口義正さんが市川勝さん、吉井隆一さんとの共同研究で「越後国　黒川藩　三日市藩」の発表をされた。参加者23人。

◆江戸東京を巡る会

9月9日(月)広尾祥雲寺～有栖川記念公園～麻布十番を巡った。参加者47人。

◆江戸名所図会輪読会

8月休会。

9月19日(木)柴田孝さん担当で世田谷の豪徳寺近辺に由来する話を中心に楽しんだ。参加者21人。

◆古文書で「八丈実記」を読む会

8月休会。

9月12日(木)参加者9人。9月27日(金)参加者8人。

◆日本の大道芸伝承会

8月12日(月)参加者3人。8月25日(日)参加者2人。9月19日(木)参加者3人。9月22日(日)に深川江戸資料館で行われたイベント「物売りと大道芸」に準備段階より参加、伝承の会の基礎研修をした。当日のイベントでは「振り売り」を披露した。参加者3人。

＊　＊　＊　＊

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しております。参加希望の方ははがきに①サークル名②会員番号③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出た時だけ先着順に参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成25年8月～9月

◆役員会8月13日(火)13人。9月10日(火)15人。◆事業部会8月6日(火)18人。9月3日(火)21人。◆総務部会8月27日(火)24人。◆広報部会8月20日(火)12人。9月17日(火)13人。◆町方書上翻刻プロジェクト8月1日(木)A8人、B9人。8月15日(木)は休会。9月5日(木)A7人、B10人。9月19日(木)A7人、B9人。◆古文書講座　入門編9月4日(水)午前87人、午後82人。初級編9月18日(水)午前54人、午後58人。中級編9月14日(土)午前38人、午後24人。

藩史研究会100回を迎えて

藩史研究会会長　大渡眞司

平成25年11月、藩史研究会は100回目を迎えました。思えば、平成17年6月に「友の会サークル設立願」を総務部会に提出したのが、つい昨日のように思われます。平成17年8月の宇和島藩を第1回として、平成25年11月の第100回鹿児島藩まで8年4カ月(100カ月)が経過しました。これまでの発表は95藩で、地方別に分類すると

北海道	1	東北	10	関東	28	甲信越	17	東海	4
近畿	14	中国	6	四国	2	九州	12	沖縄	1

となり、東北・関東・甲信越・近畿・九州の選定が多いのに対し、東海・中国・四国が少ない結果となりました。あとの5回は岩槻市・鴻巣市・古河市・佐倉市・前橋市などの菩提寺を訪れました。

発表藩の選定には特別にこれといったきまりはありませんが、強いていえば

○自分や配偶者の先祖に関連がある藩　○親しい友人の出身藩　○以前から関心がある藩　○現役時代に勤務または出張した藩　○近い将来訪ねてみたい藩

といったところでしょうか。藩の選定が決まったら、江戸東京博物館図書室や、当該市町村にコンタクトをとって資料の送付をお願いする等、発表の準備をします。

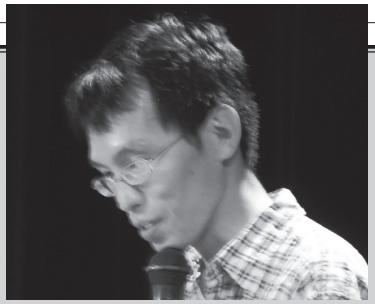
発表の際必須なのは、各藩固有の苦労話です。大藩ならまだしも、中小藩での財政悪化に対する苦労は並大抵のものではありません。どの藩でも人材の充実、米以外の特産物の育成、倹約や俸給カットなど苦労の連続ですが、どのようにして藩財政の改革や改善に努めたかはぜひ触れてほしいポイントです。また幕末の去就もそのひとつです。総じて西日本は勤王、東日本は佐幕が多いのですが、そんな中で異色の藩も登場します。その藩はなぜ独自の選択をしたのか、なぜせざるをえなかったのか、このあたりもぜひ聞きたいところです。

わずか8年4カ月の間にも、多くの出会いと別れがありました。人生は片道切符だから、お互い一期一会を大切に楽しい時間を共有していきたいと願っています。全国の藩数は265前後といわれるうち95藩しか終っていませんから、まだまだ挑戦しがいがあり興味はつきません。関心を持たれた皆様のご参加をお待ちします。友の会事務局までお申し出ください。

第132回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成25年8月17日）

「忘れられた黒船クライシス（危機）―文久3年（1863）生麦償金事件―」

講師　高尾善希さん（立正大学文学部史学科非常勤講師）



幕末の江戸では様々な騒擾（そうじょう）事件が起こりました。例えば、嘉永6年(1853)のペリー艦隊来航事件、安政5年(1858)の安政コロリ騒動、慶応2年(1866)の慶応の打ち壊し騒動などです。しかし、大きな事件であったにも関わらず、これまであまり取り上げられることのなかった事件があります。それは、文久3年(1863)の英国軍艦来航事件です。大きな事件であるわりには、『江戸東京年表』(小学館)にも記述がなく、江戸東京博物館の展示にも、あまり紹介されていません。本日は、この事件はどのような原因で起こったのか、江戸御府内はこの事件でどのような混乱があったのかということを、様々な史料から明らかにしたいと思います。

江戸は上を下への大騒ぎ

そもそもの発端は、皆さんご存じの生麦事件です。文久2年(1862)8月21日、神奈川の生麦村で薩摩藩・島津久光の行列を横切ったイギリス人が1人は殺され、2人が負傷しました。イギリス政府は、この報復のため、多数の軍艦を派遣します。翌年2月19日には、この軍艦が江戸湾の横浜沖に結集します。イギリス側は幕府に対して多額の賠償金を要求しました。幕府内部では、この賠償金の支払いをめぐって議論が起こりましたが、なかなか結論が出ませんでした。一方で、幕府は戦争をする準備を進め、そのため江戸中が上を下への大騒ぎになりました。ペリー艦隊来航事件のときにも、同様の騒ぎはありましたが、「戦争をする」という考えは幕府にもありませんでしたので、大きな騒ぎには至りませんでした。

江戸中が大混乱に

いつ戦争が起きるかわからないため、江戸にいた人びとの多くは江戸を離れ、田舎に疎開します。家財道具も江戸から遠く離れたところに移動させました。このため「板橋・千住・新宿の三口は云うもさらなり、四方口々、士・工・商三民の荷物、あるいは車、あるいは馬附、あるいは肩背負い持運ぶ事、昼夜絶間なく、とりわけ芝高輪辺は家財道具の売払など、その騒がしき事、火の今にも燃来るがごとし」(『嘉永明治年間録』巻十二　東京都公文書館所蔵)という状況になりました。また、急な避難ですので家財道具を持ち運ぶことができず、道具屋に売り払うことになり、「たとえ百両の品も二、三両位にても異議なく」(同史料)売り払ったと書かれています。このように江戸中が大混乱に陥りますと、治安も悪くなり、盗みやかたりなどがあちこちで起こりました。「深川木場材木問屋では、下野の親類に女房を預けるため、あわせて8人を江戸から避難させたが、壬生の原というところで大勢の侍の待ち伏せに合い、全員縛り上げられ衣類、所持していた650両を残らず奪い取られた」(東京都公文書館所蔵『藤岡屋日記』より要約)という記録が残っています。

14代将軍家茂と上洛中であった幕府茶坊主・今西成美の記録には、遠く離れた江戸からの風評として「江戸表に英国軍艦18艘が現れた、島津久光の首代として50万ドル要求があった、江戸城が炎上した」(東京都公文書館所蔵『成美一代自記』より要約)という噂が書き記されています。

こうした大騒ぎの時期に、世の中を痛烈に風刺した摺物や錦絵がたくさん出回りました。この大変な時期に、儲けた人(勝ち組)・損をした人(負け組)を列記したものが、相撲番付のように作られています。「当時善悪競（くらべ）」という見立番付によれば、勝ち組の筆頭「大関」は「田舎の人」で、「関脇」は「かるこ」、以下、「勤番の侍」「車力」「鉄砲鍛冶」など、たくさんの職名が記載されています。一方、負け組の大関は「江戸ッ子」、関脇は「水茶屋」、以下「粋な侍」「楊弓場」「鼈甲師（べっこうし）」…、と並びます。その他に「なぞづくし」などの笑いを誘った瓦版があり、当時の人々が、大変な時期にあってもユーモアや笑いの中で懸命に生きようとした証がいろいろと残されております。

この騒ぎは文久3年の2月から3、4月まで続き、幕府がやっと賠償金(10万ポンド)を払ったのが5月9日でした。賠償金の金貨を受け取った英国艦隊は早々に江戸湾を去り、薩摩へ向かいます。ちゃっかりしていますね。薩摩に対しても賠償金を請求し、その結果起きたのが薩英戦争でした。

レポーターからひとこと

時代の襞（ひだ）の中に埋もれていた大事件の内容を、幅広い史料を使って分かりやすく解説していただきました。また、社会勉強ということで小学生の息子さん2人が熱心にお父さんのお話に耳を傾けていたのが印象的でした。

参加者　186人。

【記録】文・写真：広報部会・福島信一

第133回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成25年9月7日）

「武士の呼称」

講師　近松鴻二さん（江戸東京博物館客員研究員）

はじめに

現在のように人物の特定や公式文書に署名する場合、苗字と名前だけを用いるようになったのは、明治4年10月12日(1871.11.24)の「姓尸不称令」施行以後です。それまでは庶民が苗字を名乗ることは許されておらず、使用することができたのは士分以上の人だけでした。また武士には苗字と名前以外に様々な呼称がありました。

武士を指す言葉

現在「武士」を意味する用語に「もののふ」「つわもの」「さむらい」などがあります。「もののふ」は上代宮廷に仕える様々の職分の人で、軍事も含み、主に物部氏が担っていました。「つわもの」は元来「器」であり、武器・兵器を指しました。後には「(武)器」を扱う者をも「つわもの」というようになりました。「さむらい」は「侍らい」の転で、宮中・御所の警護に当たり、貴人に仕えた人を謂います。この「さむらい」は自らの土地を守るため武装した農民で、権威付けあるいは「箔をつける」ために朝廷や荘園領主である貴族や神社・寺院に仕えた者です。

江戸時代の武士の公式呼称

武士の呼称例として幕末に活躍した「勝海舟」の使用例を見ましょう。

天保9年7月27日(1838.9.15)の家督相続時には

勝(苗字)**麟太郎**(仮名)**物部**(本姓)**義邦**(諱)

これが元治元年5月14日(1864.6.17)、作事奉行次席軍艦奉行に出世しますと、「位階」が加わり「仮名」は「官職名」に替わります。

従五位下(位階)**勝**(苗字)**安房守**(官職名)**物部**(本姓)**義邦**(諱)

「苗字」は「名字」とも書きます。「同一の氏」から分かれた家名で、「足利」や「新田」など、居住地の名を称したものが多く見られます。なお、氏は本姓から分かれた家名で、苗字と同じような使われ方をしました。

「仮名」は、通称のことです。乳幼児の死亡率が高かった江戸時代は、生まれてすぐに付けられる「幼名」と、ある程度成長してから付けられる「仮名」があります。仮名は大名や大身の旗本や後述の「諸大夫」に任じられた人を除き、生涯使用していました。

「本姓」は、家筋の名称のことで、天皇が臣下に対して直接下賜したものが多く見受けられます。「源」「平」「藤」「橘」等が著名です。読むときは「みなもとの」「たいらの」のように「の」を入れます。

「諱」は、身分の高い人の本名・実名をいいます。元々死後の名前(忌み名)のことでした。死後、実名を呼ぶことを忌んで口にしなかったことから生まれたとされています。後には、貴人などの実名を口にすることを憚り、実名の尊称を「諱」と呼ぶようになりました。諱は多くの場合元服時に命名されています。上級武士の諱に「偏諱下賜」の制度がありました。元服時や藩主就任時に、将軍の諱の一字(ほとんどが下の文字)を下賜されることです。水戸黄門こと水戸藩2代藩主徳川光圀の「光」は3代将軍徳川家光から偏諱下賜されたものです。

「位階」は律令で定められた官人の序列を現す等級のことです。親王は一品から四品まで。臣下については正一位から少初位下まで30階あります。これは幕臣の格付けにも用いられました。上級職に就くと従五位下に叙され、朝廷から「位記」が給されました。従五位下に叙されることを「諸大夫に任じられる」といい、公家となり、参殿を許されました。

また「官職名」として、律令官制の地方長官・国司を意味する「安房守」というような「守名乗り」や「左衛門尉」のような中央官庁の役職・職階を名乗ることが許されました。これらの役職・職階は格式を示すだけで実体はありませんでした。大名は家督相続前後に従五位下に叙爵されました。

海舟の名乗りは前述の「姓尸不称令」施行以降は「**勝**(苗字)**安芳**(名前)」となりました。名前は、安房守の安房を「あほう」と読み、同音の「安芳」に変えたといわれています。

なお、「海舟」は、佐久間象山から譲られた「号」です。号とは、学者、文人、画師などが使ういわばペンネームです。このほか「諱」以外の名前で、常日頃口にできる「字」があります。「三国志」の英雄・諸葛孔明の「孔明」は字で、諱は「亮」です。

その他の呼称

「隠居名」は、家督を後継者に譲った後の名乗り。「法号(戒名)」は仏教で、「神号」は神道で用いられる死後の名。「諡号(しごう、おくりな)」は、生前の徳や行いに基づき死後に贈られる称号のことです。

まとめ

武士の呼称は格式を重んじ、成長や昇進等に伴い、その都度改められました。「位階」や実体はなくとも「官職名」を欲しがったものです。現在でも「院殿大居士」といわれるように字数の多い戒名を求めるのは、その残影かも知れません。

レポーターからひとこと

これまで氏と苗字の関係がよくわかりませんでしたが、今回の講演を拝聴してとてもよく理解できました。

参加者154人。

【記録】文・写真　広報部会・光田憲雄

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 25 年 9 月 29 日）

「再訪　江戸城周辺探訪 ーその４（外濠）ー」

秋晴れの午後、前回解散場所の市ヶ谷門に集合し、外濠周辺の遺跡、遺構を訪ねました。

市ヶ谷門から番町へ

JR 市ヶ谷駅横には市ヶ谷門の石垣が残され、向かい側に門の外郭を示す黒大理石も埋め込まれていました。駅から抜ける上り坂奥が青山主膳の屋敷跡で、腰元お菊が髪を振り乱し帯を引きずって走った伝説からこの坂を帯坂というそうです。旗本の大番組の屋敷があったためこの辺りを番町と呼び、町名として残っています。

外濠公園から喰違門へ

外濠公園の市ヶ谷・四ツ谷間は桜、イチョウ、松などの大木の間を縫うように散策路が続きます。土手下の中央線は外濠を埋め立てた場所を走っています。JR 四ツ谷駅を半蔵門方向へ歩き、左折すると心法寺です。家康の開基、千代田区最古の浄土宗寺院で、幕臣の墓などもあり、境内の塩地蔵は塩を長年塗られ石の体が細っていました。JR 四ツ谷駅横が四谷門跡です。堅牢な石垣が一部残り、甲州街道の要衝の面影をとどめています。近くの迎賓館を右に見て下り坂の紀伊国坂の途中に紀伊徳川家の武家門があります。その向かい側はジグザグに築かれたからという喰違門（くいちがいもん）跡で、右手は弁慶濠です。門を抜けて四谷門あたりまでが尾張殿邸跡で、上智大学となりグラウンドは外濠を埋めて造られています。

▲豊川稲荷本殿

喰違門から清水谷公園へ

喰違門から赤坂門へ抜ける下り坂が紀尾井坂で、紀伊家、尾張家、井伊家中屋敷に囲まれていたことから名づけられ、町も紀尾井町といいます。井伊家跡はホテルニューオオタニとなりました。右折し下ると左側一帯が清水谷公園です。紀伊家中屋敷跡ですが、清水が湧き出ていたこと、紀伊家と井伊家の境が谷だったことによるそうです。園内に「大久保公哀悼の碑」、そして玉川上水石枡が置かれていました。

▲清水谷公園玉川上水石枡

麹町から赤坂門、溜池へ

公園裏の急な石段を上っていくと麹町に出ます。錦絵の版元でもあり、今でも貴重な江戸の切絵図を出版した金鱗堂はこの麹町にあったそうです。現在はビルの立ち並ぶビジネス街に変わりました。諏訪坂を下って外堀通りに出る所が赤坂門跡です。弁慶濠方向から石垣の左部分が見えます。擬宝珠（ぎぼし）の弁慶橋から青山通りへ進むと、豊川稲荷の赤い幟（のぼり）旗が見えてきます。愛知豊川稲荷を分祀した曹洞宗のお寺です。線香の匂いが漂っていました。少し戻り右折し赤坂不動尊を見ながら行くと新名所「赤坂サカス」で、ＴＢＳ周辺一帯は松平安芸守中屋敷でした。向かい側が江戸城の鎮守山王日枝神社です。大鳥居左の細い石段の参道を、小さい赤い鳥居をくぐりながら上っていきました。昇り竜のように続く 87 もの鳥居が壮観でした。石造りの夫婦猿が社殿を守っています。赤坂から虎の門まで瓢箪形の溜池がありましたが、今は一部を残し、外堀通りや商業ビル街となり交差点と地下鉄に名を残しています。東京メトロ溜池山王駅で解散、約３時間半、アップダウンの連続、サプライズありの楽しい見学会となりました。

▲山王稲荷神社奉納鳥居

参加者128人。

【記録】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・菊池真一

江戸東京博物館友の会特別観覧会（平成25年8月17日）

江戸東京博物館　開館20周年記念特別展　「花開く　江戸の園芸」

（この特別展は９月１日に終了しました。）

江戸博友の会特別観覧会が8月17日（土）17時から開催され、ホールで担当の市川学芸員から「見どころ解説」のあと特別展を観覧しました。

幕末に江戸を訪れたイギリス人植物学者、ロバート・フォーチュンの旅行記が展示され、その中で「緑を愛する国民性が文化生活の高さを証明するものならば、日本の低い層の人々は、イギリスの同じ階級の人たちに較べずっと優っている」と述べ、その驚きを記しています。

会場は屏風絵、錦絵の展示が中心で、染井の植木屋、伊藤伊兵衛の刊行した「花壇地錦抄」の版本類、そして梅屋敷、百花園の錦絵などもありました。また、庶民の園芸熱の陰で武士が愛した珍品（奇品）の松葉蘭、福寿草、小万年青（こおもと）などが紹介され、その蒐集は趣を凝らした植木鉢と対になっており、武士の熱の入れようが伝わってきました。

その他「江戸の園芸三花―朝顔・花菖蒲・菊―」と「園芸文化の明治維新」の展示があり、楽しく観覧できました。　参加者87人。

【取材】文：広報部会・田端道宏

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成25年9月27日）

江戸東京博物館 開館20周年記念特別展
「明治のこころ
ーモースが見た庶民のくらしー」

12月8日まで開催される特別展「明治のこころ ーモースが見た庶民のくらしー」の友の会特別観覧会が9月27日(金)17時から開催されました。

ホールで担当の小林淳一副館長から、モースのコレクションは海外における二大日本コレクションのひとつであること、またモースの足跡と日本への思いなどについての解説がありました。

ピーボディー・エセックス博物館の「モース・コレクション」とボストン美術館の「モース日本陶器コレクション」などから、320点の生活道具や陶器をはじめ、貴重な写真、モース自身の日記、スケッチなどが展示されています。

第1章　モースという人

明治10年(1877)、初来日。「大森貝塚」を発見したことで有名です。東京大学の初代動物学教授で、ダーウィンの進化論を初めて日本に紹介したほか、近代考古学や動物学の基礎を築きました。

大森貝塚で発見した貝殻、縄文時代の土器などが展示されています。

第2章　日本と日本人

江戸の暮らしがまだ残っていた明治初期の庶民の暮らしぶりが、モースの収集した多様な品々から知ることができます。 また、当時の人々のこぼれるような笑顔の写真には、ほのぼのとさせられます。

展示品のいくつかを紹介します。

・房楊枝　当時の歯ブラシで、未使用のものからすり減った状態のものまでありました。

・台所　とても精巧にできたミニチュアの台所模型があり、当時の台所の様子を窺(うかが)い知ることができます。また、当時使用されていた実物の台所用品も展示されています。

・食べ物(食品サンプル)　かまぼこの張子がありました。明治初期には既に現代に通じる食品サンプルがあったとは驚きです。

・掛け花入れ　モースの日記「日本その日その日」にも載っているトンボ、バッタ、キノコをかたどった竹製の籠(かご)(花入れ)がありました。とてもよくできています。

・巡り地蔵　人の背丈ほどもある厨子には子安地蔵が安置され、これを背負って家々を巡っていました。

・看板　野菜、足袋、櫛、おしろい、釣り具などがデザインされた看板。これらの看板は、店の軒下に吊り下げたり、店先に置かれていたものです。

・道具　大工、鍛冶屋、桶屋、木地師(挽物師(ひきものし))、提灯屋などの職人が使う道具類が展示されています。回転させて木材を加工するためのロクロ(旋盤)は興味深いです。

第3章　モースをめぐる人々

モースは、文部官僚・好古家の蜷(にな)川式胤(がわのりたね)から陶器について学びました。数年後、蜷川が亡くなり彼の著書『観古図説 陶器之部』をもとに陶器を収集します。また、明治期の日本美術を収集したことで世界的に著名なフェノロサ、ビゲロー、ウェルドらの来日のきっかけをつくりました。

モース日本陶器コレクションから21点の陶器が紹介されています。

特別展示：生き人形

幕末から明治20年代にかけて、まるで生きた人間のように見える等身大の生き人形が見世物として流行しました。

モースが博物館の展示用として作らせた農民の一家3体と甲冑(かっちゅう)武士1体の生き人形が展示されています。どれも百数十年前に作られたものとは感じさせない、マダム・タッソーの蝋(ろう)人形にも負けないようなリアルな人形です。　　参加者95人。

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

江戸博クリップ

「農村の歴史から都市の歴史へ」

展示事業係　　小酒井　大　悟

はじめまして。今年の6月から展示事業係に配属されました、小酒井と申します。こちらに勤務して、あまり日が経っていないので、自己紹介も兼ねて今まで学んできたことや前職のことについて記そうと思います。

大学・大学院に在籍していた頃は、いちおう、日本の近世史・江戸時代史を専門に勉強し、とくに、江戸時代の農村がどのようにできてきたのかをテーマにしていました。江戸時代の農村の歴史に興味を持ったのは、私の実家が新潟の農村にあるという、いささか単純な理由によります。

大学院を出る直前に、東京都小平市で自治体史を編さんする仕事に就きました。小平市の辺りは、かつて江戸近郊の農村部だったわけですが、そこで生産された農作物が早くから江戸で販売されていたり、村人が江戸に仕事を求めて離村したり、といったできごとを知るにつれ、「江戸ってどんな所だろう」という関心が湧いてきたのでした。

そうした折、運良く、江戸東京博物館に勤めることができました。もっとも、博物館の勤務は初めてで、戸惑うことも未だ多いのですが、展示をはじめとする様々な仕事を覚えるなかで、都市江戸やそこに暮らす人びとの歴史を学んでいければと考えています。よろしくお願いいたします。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸 名所図会を歩く…⑩

［芝浦から月波楼］

御穂鹿嶋神社

神田雉子町の名主、斎藤家の親子三代によって編纂された『江戸名所図会』は寛政の頃に祖父、長秋が編纂を開始し、文化の末に父、縣麿が内容を補い、文政の頃月岑の代で完成しました。およそ30年の間に江戸は繁栄し、変貌しました。しかし、その変化を一つ一つ改める事はなかったので、その内容は実際に刊行された天保の頃の江戸の様子とは異なるところもありました。

ようやく涼しさを感じられるようになった9月の初旬、前回の赤羽橋よりさらに南に下ってみました。基点はJR田町駅です。

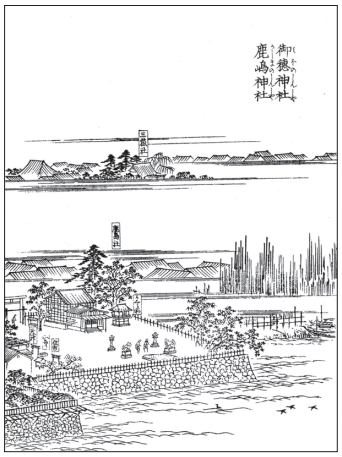
芝浦から毘沙門堂

田町駅三田口から出て、第一京浜を右へ。三菱自工ビルの角にたつ「江戸開城西郷南州　勝海舟　会見の地」の碑から右手の小路に入るとめずらしい合体した阿吽の狛犬が見えてきました。御穂鹿嶋神社です。この辺りは中世から江戸湾の重要な港でした。江戸期には「本芝町の東の海浜をいふ。芝口新橋より南田町の辺までの惣名なり」と図会にもあるように、かなり広い範囲が芝浦と認識されていました。神社の前は本芝公園で、「此地を雑魚場と号け漁猟の地たり。此海より産するを芝肴と称して都下に賞せり」とあるように、雑魚場跡の碑が立っています。御穂鹿嶋神社は、本芝通り（現在の第一京浜）から少し西の横丁に入ったところにあった御穂神社と、もともとこの地にあった鹿島神社が平成18年に合併したものです。御穂神社は駿河国の海人がこの地に移り住んで古郷の神を勧請し、鹿島神社は常州鹿島大神宮の社地から流れてきた小祠を祀ったとされています。御穂神社のあったところには神輿庫と、小さな稲荷があるだけでした。

芝4丁目交差点を北に行き、3本目を右に入ると高架の手前に毘沙門堂があります。松林山正伝寺という日蓮宗のお寺です。本尊は伝教大師作と伝えられ、江戸期には江戸城大奥から広く庶民まで信仰を集めたそうです。今も正月、五月、九月の初寅の日には賑わっているのでしょうか。

田中山西應寺から小山神明宮

毘沙門堂から戻って第一京浜を横断しそのまま真っ直ぐに行くと西應寺に突き当たります。応安元年（1368）明賢上人の草創になるこのお寺は、天正19年（1591）には家康公より寺領10石の御朱印状を拝領するほどの規模でしたが、慶応3年（1867）薩摩藩邸襲撃事件の時、兵火によって全焼します。その後再建した建物も戦災で全焼し、幕末の開国に際してはオランダ公使宿館に充てられていたという建物もすべて灰燼に帰しました。往時を偲ばせるものは、お寺の由緒が刻まれた文化12年（1815）建立の石碑のみ。本堂前庭のメタセコイアの脇にひっそりと立っていました。



▲御穂神社・鹿嶋神社

▲金杉毘沙門堂

西應寺裏は薩摩の七曲がりといわれた道の屈曲がそのまま残っています。その道をたどって芝3丁目交差点に出ます。さらに西に進むと三田です。三田という地名は「或ハ御田及び箕多に作る」とあり、「古神領に寄られし地を御田と書きたる由古老の説なり」ともあります。三田の辺りを渡辺綱の旧跡という説がありますが、図会では「誤りなるべし」としています。それにしては、三田には渡辺綱に由来する地名や遺蹟があります。綱坂は「松平隠岐侯と会津家との藩邸の間を寺町へ下る坂」（三井倶楽部とイタリア大使館、慶應大学の間）、綱ヶ手引坂は「有馬家藩邸の南の坂」（三田一丁目交差点から西に登る坂）。さらには綱ヶ産湯水が肥後侯（会津）の園中、綱ヶ駒繋松は隠岐侯（伊予松山）の藩邸、綱塚は功雲寺の境内にある事が図会にも書かれています。

綱の手引坂を上り、三井倶楽部とオーストラリア大使館の間の交差点を右に下る坂は神明坂です。図会では小山神明宮とされている元神明宮が下にあります。本殿はコンクリート打ちっ放しの一見しゃれた住宅かと思われる建物の2階に鎮座していますが、境内の雰囲気は古びた感じです。9月半ばの大祭に向けて準備が進められている様子でした。

春日明神社と月波楼

綱の手引坂へ戻り、三井倶楽部の瀟洒な洋館を過ぎて右に折れ、綱坂を下ります。坂の途中からは慶應大学敷地で、元は島原藩中屋敷でした。ここには「肥前島原の松平主殿侯別荘の看楼の号なり。眺望よく、洞庭の風景を縮めたる如く…」とされた3階建ての月波楼がありました。品川の海が眼下に見渡せたのでしょうね。

大学敷地内を散策し、東門から出てすぐ左隣は春日明神社です。天徳年間（957～961）、武蔵の国司藤原正房が和州三笠山春日四所の御神を勧請しました。三田の産土神で例祭は毎年9月に行われます。本殿の裏は三田キャンパスのシンボル、赤煉瓦の慶應大学旧図書館。明治と江戸が隣接した風景になっていました。

【取材】歩いた人（文・写真とも）：
広報部会・中村貞子

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています。）

催事案内

古文書講座

各編とも来年１月から第３期を開講

各期ごとに改めてお申込みいただくことになっておりますのでご注意下さい。自動継続ではありません。なお、人数に余裕のある中級編の受講はおすすめです。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教)
- 開催日：1/8(水)、2/5(水)、3/5(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/15(水)、2/19(水)、3/19(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/18(土)、2/15(土)、3/15(土)

(注意)各講座とも、午前の講座か午後の講座かの希望を明記してお申込み下さい。
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全３回1,500円(初回一括払い)
- 申込締切：各講座とも11月30日(土)必着

◆第２期の残日程
入門編12/4(水)、初級編11/27(水)、中級編11/16(土)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

イラスト：
名取陽子さん

友の会特別観覧会

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展「大浮世絵展」

◆国際浮世絵学会の創立50周年を記念して、浮世絵の名品を世界各地約45カ所から一堂に集めた、かつてない規模の展覧会です。代表的な作品約340点はまさに浮世絵の「教科書」、「国際選抜」となる展覧会です。ご担当の我妻学芸員に「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。
- 開催日：１月10日(金)17時～19時
- 申込締切：12月20日(金)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／１階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

友の会セミナー

第135回「和食の文化、江戸っ子の食」

講師　大久保洋子さん(日本家政学会食文化研究部会長)

◆100万都市といわれる、江戸での庶民の食事情をひもときます。初めは上方文化移入期ですが、食材は新鮮なものは近在から調達し、近郊の生産者が工夫を重ねて発展していきます。遠方からの加工品なども集中します。江戸中期には江戸独自の感性を活かした食文化が発展します。都市化した江戸は世界でも先端を行く活気あふれた都市に変貌していきます。江戸後期の化政期には頂点に達し、料理書も数多く出版されています。わかっているものだけでも200冊以上です。外食も家庭での日常食も工夫を加えて、和食の基本が培われます。エコでもある江戸料理を垣間見ます。

◆講師略歴：おおくぼ・ひろこ
実践女子大、同大学院卒業。博士(食物栄養)、管理栄養士。実践女子大学生活科学部学部長　食生活科学科教授を経て現在に至る。著書は、『江戸のファーストフード』講談社。『江戸っ子は何を食べていたか』監修。『江戸の食空間』講談社。現在放送中のＮＨＫカルチャーラジオ歴史再発見『江戸の食・現代の食』他。
- 開催日時：11月23日(土)14時～15時30分
- 申込締切：11月14日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】大澤憲一(事業部会)

第136回「飛脚屋利右衛門の旅のゆくえ」

講師　玉井幹司さん(物流博物館学芸員)

◆天保期、江戸の飛脚業界に利右衛門というご意見番のような人物がいました。何かコトが起きると利右衛門が奔走して解決策を講じます。あるときは盗難にあった飛脚荷物をめぐって、探偵めいたことをしたこともありました。利右衛門は65歳の頃に東海道各宿を巡る旅に出ますが、これも飛脚業界を守るため。そんな利右衛門のお話を中心に、やがて明治になって飛脚たちが内国通運会社という運送会社を作っていくまでをお話しします。

◆講師略歴：たまい・かんじ
昭和36年(1961)東京生まれ。昭和55年(1985)学習院大学文学部史学科卒業。川口市文化財調査員、入間市博物館学芸員を経て平成９年(1997)より物流博物館学芸員。最近、連載をまとめた『物流今昔』(全日本トラック協会)という小冊子を発行。ここ数年、「千葉古文書の会」の方々による飛脚史料の翻刻作業をサポート。
- 開催日時：12月14日(土)14時～15時30分
- 申込締切：12月５日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

見学会

「広重『名所江戸百景』周辺探訪 ーその９（茅場町・築地周辺）ー」

◆広重『名所江戸百景』は安政期の江戸の四季、風景、風俗などを細やかに描いた作品です。この企画は広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪し、今の街の姿の中に江戸時代の風景、背景を思い浮かべ、そこに吹く風や情景を少しでも感じていただこうとするものです。今回は、茅場町から鉄砲洲～佃島をめぐり、浜離宮までを歩きます。

江戸時代、日本橋川に面した茅場町から対岸の小網町まで、鎧の渡しがありました。絵中、その対岸に立ち並ぶ倉の白壁、岸に立つ娘の白い襟足、そして身を翻して飛ぶツバメの白い腹、この三白がまぶしい「鎧の渡し小網町」絵や、絵中、江戸湾に突き出た石垣の上の緑の松が映えるのは浜御殿、現在の浜離宮恩賜庭園です。波の上を飛ぶ愛嬌のあるカモメの姿は心和ませます。江戸湾の波、うっそうとした浜御殿の緑と石垣は広重の作品の中でも江戸時代の原風景を今に残す「芝うらの風景」絵などを訪ねます。

所要時間は約３時間半、都営地下鉄大江戸線「築地市場」駅での解散となります。

【今回訪ねる広重の作品】

「鎧の渡し小網町」「永代橋佃しま」「佃しま住吉の祭り」「鉄砲洲稲荷橋湊神社」「鉄砲洲築地門跡」「芝うらの風景」

- 開催日：11月24日(日)12時45分集合
  集まり次第、時間前でも順次出発します。
- 集合場所：東京メトロ東西線「茅場町」駅10番地上出口
- 申込締切：11月14日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本　隆　(事業部会)

第５回「えど友研究発表会」を終えて

～来年度は、多くの会員の応募をお待ちしております～

事業部会　五十島正修

第５回「えど友研究発表会」は、多くの会員の皆さまのご協力で、無事終了することができました。誌面をお借りして厚くお礼申しあげます。開催に当たり、担当者として悩ましかったのは、当初応募者が無かったことです。募集のお知らせは毎年５月発行の『えど友』に掲載されますが、応募者が年々減少傾向にあり、今年はとうとうゼロという結果でした。今年発表されたお二人（佐藤幸彦、若松謙二両氏）には、特にお願いして実現しました。発表会の趣旨は、「江戸東京の歴史と文化に関する」長年の研究の結果を発表したいという会員のニーズに応えるとともに、友の会の一層の活性化に資するというものです。なにとぞ趣旨を御理解いただき、来年度はお一人でも多くの会員の皆さまのご応募をお願い致します。

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展

「明治のこころ ーモースが見た庶民のくらしー」

会　期　9月14日(土)～12月8日(日)
休館日：毎週月曜日
　　ただし11月４日は開館、11月５日(火)は休館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
　　＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展

「大浮世絵展」

会　期　１月２日(木)～３月２日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし１月13日、１月20日は開館)
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
　　＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

企画展のご案内

●「幕末の江戸城大奥」

会　期　10月29日(火)～12月8日(日)
休館日：毎週月曜日
　　ただし11月4日は開館。11月5日(火)は休館
会　場　常設展示室５階　第２企画展示室

お申込方法

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記して下さい。お間違いないよう、お願いします。

◆**普通はがき**に、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号**(必須)**、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1
　　江戸東京博物館**「友の会事務局」**
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
　なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会報＜えど友＞第76号
平成25年11月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、国定美津子、前田太門、菊池真一、竹中裕見子、田端道宏、光田憲雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網 1-4-1　電話 03-3626-9910